

琉球大学学術リポジトリ

一年生草花の作り方 ーシーズンにそなえてー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20260

花率も100%に近く果物もそれ程小さくないことが明らかとなった。この方法は第1回収穫までの期間を短縮ししかも夏実の出盛りの山を小さくする一つの立派な方法であると思うが、時には草本が小さくて小果実を生ずる恐れがある。この様な場合には植付期を3-4か月早めることも一つの方法であるが、又施肥回数も多くして草

本の生育を図ることも有望な方法の一つである。その他一般に人為開花の方法が採用されるようになれば施肥期は開花処理期に対応して考えることが必要となるから、施肥期の決定は今後の大きい研究題目である。

(寄稿・香川大学教授 渡辺正一)

一年生草花の作り方

…… シーズンにそなえて ……

3、4月の暖かな気候になつた時播種し、夏から秋にかけて開花し、その年内に枯死する種類の草花を1年草と呼びます。1年草の中よく栽培されるものには、百日草、千日紅、万寿菊、コスモス、ヒマワリ、ケイトウ、ホウセンカ、アサガオ等があります。これらの作り方について述べてみましょう。

1. 土壌と肥料

排水のよい粘質壤土ないし砂質壤土が適しています。1年草は比較的成長が早く、性質もあまり強くない点から、重粘地や軽い砂地にはあまり適しません。このような土壌は相当の堆肥などの有機質肥料を入れなければなりません。

鉢植や箱植では、一定の限度内の土壌で植物が生育しますので、肥沃で固まることがなく、水はけのよい土壌を用いなければなりません。一般に細い根が多く茎や葉が軟かい種類では、土壌、腐葉土(落葉が腐つて土になつたもの)、川砂を3:2:1の容積割合にします。成長が旺盛で、ひよろ長になり易い種類では、その割合を全部等量にします。これらの土壌の良否を判断するには、適度に湿気をおびた時、配合土を手で握り、塊になつたものを上からおしつけた時、容易に碎けて砂状にくずれる時はあまり軽すぎ、反対に多くの小さな土の塊が出る時は粘り気が強く排水が不良ですから、前の場合には粘質土を幾分増し、後の場合には川砂を加えて調節します。

肥料は堆肥、厩肥等の有機質肥料を坪当たり1貫と硫

安60匁、過磷酸石灰60匁、塩化加里55匁とし、全肥の半分は堆肥と共に基肥とし、半分は追肥として適宜に与えます。尚種類によつては鶏糞、大豆かす、油かす等の粉末にしてやるか、腐らして与えます。

2. たねまき

播種期は栽培の目的、種類によつて気候上の温度と日照時間によつて支配されることが多いが、1年草の多くの種類は沖縄では3月が適しています。高温性の朝顔は4、5月の候に播きます。夏から秋にかけて咲くケイトウも4、5月が適しています。

発芽力のある種子は水分、酸素、温度が適当であれば発芽します。栽培場所に直接播種する直播法では、移植し難い植物や性質が強い種類、種子が安い場合に行なわれ、発芽後数回にわたつて間引きし、種類により適度の間隔をおくようにします。しかし優良種で種子の節約を計る場合や、1、2月ごろ早播きしてビニール等で保温し、育苗する時は箱や鉢に播種して移植します。

直播の場合にはよく土地を深く耕やして、軟らかくし基肥は出来れば全面に混ぜ合わせて肥沃にするのがよいが、肥料が割合に少い時は植物の根が張る範囲によく混和しますので畦に沿うて施します。畦は光線と通風をよくするために、一般的には南北の方向に作ります。その距離は植物の草丈と枝の開張によつて差があります。百日草に例をとりますと、草丈約60cmで開張性でありますから畦幅は60cmにします。播種法としては撒播

条播、点播がありますが、小粒の種子は撒播か条播にし大粒種子は点播します。覆土の厚さは大体種子厚さの2倍程度にします。非常に小粒の種子は土に押しつける程度にします。あまり土壌深く播種しますと、酸素の供給が悪く、発芽が後れます。灌水は播種後に行います。播種後敷草をなし、発芽したら直ちに取り除きます。

鉢又は箱播の場合には深さ10センチ内外のものを用います。排水をよくするために底に沢山の穴をあけ下の方に瓦片や石ころを入れ、その上に播種用土のふるいかすを入れ、1分ないし2分目ふるいでふるい分けした細土を充たします。

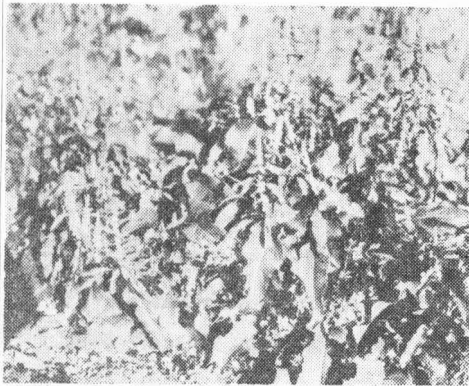
3. 管 理

育苗したものはすぐ定植するか、種類により1-2回仮植して定植します。大方の草花は本葉5枚位の時までに定植することが出来ます。

栽培管理、降雨により土は自然に固くなり、又雑草が生えます。そのため中耕を行い根の活動を盛んにします。畦間を鋤で根元から僅か離れて浅く耕し、ここに追肥を与え、反対の部分の土壌で覆い、2回目の追肥の時にはこの作条の凹所に与え、第1回の部分の土壌で浅く覆います。中耕は早目に行ない根が畦間に伸びたら根を切らないようにします。鉢植の場合でも地表が固まった時は根を傷めないよう浅く尖った棒で地表をかきまわし、気水の流通をはかります。それと同時に追肥を与えます。灌水は土壌条件、植物の生育状態をみて十分行うようにします。

(友 寄 長 重)

訂 前号の10ページの左の上から三行目の
正 ギンネムはギシギシのあやまりです。



道端によくあるギシギシ